

干拓地という条件は農業面において大きく作用しているものと考え、福山市の川口農協地区をとりあげて干拓地に成立する農業の概観を見た。しかし最後の干拓が終つて100年近くたつた今では、技術の進歩とあひまつて、あまり特殊な農業形態と残つておらず、文献によつて過去の事実を列挙した結果になつた。

オ2章では「ある地方都市がその都市規模を拡大するにつれて、周辺の農業はどのように変化してきたか」というテーマのもとに、同じく川口農協地区をとりあげて考察した。

農業立地は、いかなる内容においてても都市市場を経済的中心として構成されざるを得ないし、都市という農産物の市場が農産物の需給及び価格の決定にきつめて重要な地位を占めていることは明らかである。しかし、都市がその周辺の農域に影響をよつのは、単に農産物の需給を通してだけではなく、都市において発達している資本主義経済は、その周辺の農域に反映して農業の分解を促している。調査不足、知識不足によつて、結論を出すところまではいかなかつたが、川口地域においては、逆立ちしたチューネン圈的配置をよつて、都市化に対応してきているのではないかと私は考えた。

尚、最近臨海工業地帯の造成が全国的に盛んであるが、福山港において新工業地帯建設のための土地造成工事が現在着々と進められている。この埋立工事は、昭和37年3月スタートし、40年末までにはその全工程を完了する予定であるが、220万坪、総事業費150億円という大規模なものである。日本鋼管福山製鉄所の誘致が決定しているが、これにより、福山市の将来への大きな発展が予想される。

「静岡県榛原郡川根町に於ける茶業の地理学的考察」

原 千里

調査地域は、東海道線金谷駅より、大井川鉄道で30分程の大井川中流に位置する榛原郡川根町に属する。赤石山脈は、赤石岳を主峰とし、北々東より南々西に走っているが、調査地域はその余脈をうけて、畑3.2%、水田0.4%、地域中のおお8%を山地が占めている山間地帯である。地形の制約上より、静岡県下で最も専業農家率は極めて低く、山林業を兼業とするオ1種、オ2種兼業農家が多い。耕地面積に於ける百分比は、水田13.6%、普通畑25%、茶園60%であり、茶栽培農家率が90%以上の商業的栽培地域

といえる。東京教育大学の山本正三氏は、静岡県茶栽培地域を買葉工場率、生葉買率、茶園率に基いて5つのタイプに分けているが、この分類に従えば調査地域は「山向地域の茶業」に属する地域で、小規模な工芸的茶生産地帯といわれている。そこで、論文は自分の実力外であると、先見の明よろしく論文というよりも、山本氏のいくつかの論文を参考に、現地調査を通じて、山地型茶業の地域性の足跡をたどつてみることにした。しかし、町役場の移転に遭遇し、利用できる資料が殆んどなかつたこと、アンケート回収が悪かつたことに加え、交通が非常に不便であつたことは全くのハンディキャップになり極めて不本意な調査になつてしまつた。

川根町に於ける茶業構造は、大井川流域の川根地方に共通的特色を有し、茶への依存度は上流の山向地帯に進むほど大きくなる。これは、耕地面積の狭少性と、茶栽培の自然条件によるものであるが、同様傾向は、同一地域内の森林所有面積規模に差がある部落間にもみられる。しかし水田は飯米自給には足るに足らず、普通畑と自給作物を目的としたものであり、茶はこれら地域の唯一の農業現金収入があるので、茶依存の地域差は小さいといえる。階層別の依存度に関しては、上、中、下層中、中層農家に於て茶収入の比率が最も高いが、これは下層では茶園面積が少く、兼業収入の占める比重が高いこと。又、上層では林業収入が増加し、茶収入の地位がやや低下するからである。

この地に於ける茶栽培の歴史は古く、記録では江戸時代にさかのぼることが出来るが面積的な拡大は、安政の年の横浜開港に始まつたものである。輸出貿易の進展と共に、明治～大正時代にわたつて、茶は、ひえ、あわ尋の雑穀、芋類にとつて代つたが、昭和以前に農業経営中には於ける現在の地位はほぼ確立されていた。古来より川根茶と称して、高級茶の名声が高かつたが、この声価は、明治の全国的な粗製濫造時代に参入り製法から守治製法への転換で更に拍手がかかつた。しかし、その根底には、優等茶生産に適する自然条件があり、製法が生葉の持ち味を有効に發揮したことは、重要な要因であつた。即ち、栽培条件としての、土壌、気温、降水、光線等が茶の品質を左右する重大な要素であつたと思われることは否定出来ない。自然条件と共に、他方、優等茶生産に対する伝統的努力は、一茶葉形態である自園自製へうつがられている。豊産的傾向の枚の原や、富士の茶に比較すると、茶製造に細心に注意が払われ、破格的な茶価が見られる。調査地域内で所によつては委託製造も行なわれているが、これも原則的には自園自製形態と等しいものである。

今日この地域は極めて *Static* で安定的な茶生産地域であるが、見落すことの出来ない一方の要因に兼業としての林業の役割が上げられる。林業は冬期の農閑期に行なわれるものであるが、耕地面積の減少性から茶収入のみは依存出来ないこの地域に於て、自営林業、或は、森林労務への従事によつて、農家収入を補う上には極めて有利な兼業であつた。現在、調査地域は水田所有、非所有の2部落落のタイプに分かれるが、一般的に非水田所有型の茶園+普通畑+森林の部落の方が消費生活が滞弊であるが、これは、この種の部落に於て山林業の結びつきがより大であるからと懸われる。

即ち、田植時には茶製造へのより集約的労力投下が可能であると同時に、農閑期には、森林所有農家は、森林採伐或はしいたげ栽培業に従事し、下層農家に於ては上層農家への労力提供という組み合わせでより多くの収入が得られるからである。この特色は、目を転ずれば、そのまま調査地域と他地域の関係にあてはまるもので、茶業経営と山林業の結合の堅実性を物語っているように見受けられるのである。

結びとして、離農者の増加傾向にある。今日の日本の農村地帯に比較し、なお一層茶業への努力が払われ、茶業振興を計る町の基本計画は、川根町の地域性があるのではないかと感じている次才である。

高原火山の地形とその農業土地利用

樋山 宏子

戦後食料増産、復興軍人救済のために、日本のあちこちで開拓が行われた。入植してノ8年の経過とともに、最近ではそれぞれその地域に合った農業形態を示している。この農業経営(農業土地利用)の変化は何によつて強く支配され、影響されているのかという事に向題をしばらく、一開拓地の例として栃木県の高原火山マ麓の入植地を調査した。

調査地域は、栃木県の北部に位置し、周囲48Km、直径約14Kmの火山であり、その東側に那須森林地が隣接している。

[自然環境]

高原火山は塩原火山、高原火山の西火山が併り合一して双子火山を作っている円錐火山である。この火山はオゾ紀層の基盤の弱線にそつて噴出したもので、洪積世中期ないし末期に形成されたものと推定される。この火山をオゾ紀層の山地、塩原火山、高原火山、熔岩流の堆積面、熔岩及び火山碎屑物の台地、浮石流の丘陵、寄生火山、放射谷、河岸段丘、谷底平